

Title	スピノザにおける「神の存在証明」 : 『エチカ』第一部定理11について
Author(s)	中野, 彰則
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/58520
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

論文審査の結果の要旨

氏名	中野彰則
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第24151号
学位授与年月日	平成22年9月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	スピノザにおける「神の存在証明」 — 「エチカ」第一部定理11について —
論文審査委員	(主査) 教授 望月 太郎 (副査) 教授 須藤 訓任 教授 上野 修

論文内容の要旨

本論文は、スピノザ『エチカ』第一部定理 11 における 4 つの神の存在証明について、デカルトが『省察』で行った神の存在証明との連続性・非連続性を踏まえて、スピノザにおける因果性概念及び実体概念の変容とその存在様相との関係、さらにその独自性を考究したものである。全体は 2 部 6 章からなり、4 百字詰め原稿用紙に換算して、約 300 枚の分量である。

申請者は、実体が存在するとは考えられないからといって、どうしてそれが現実に存在すると主張できるのか、という問題意識から出発して、第 1 部では、あらゆる因果性の原型として理解される自己原因としての実体の因果性の問題を扱った後、さらに修正された「因果性の公理」(デカルト)に基づき、存在様相に関して「可能性」を排除することによって「必然性」と「不可能性」に絞り込んだ上で背理法に則ってなされる実体の存在証明の論証構造を問ひ、またさらに「内的作用因」として定義された十全な観念としての実体が存在することの必然性を論じる(第一証明及び第二証明)。続いて、第 2 部では、神の実体における存在と全能、属性の無限性、事物性とその完全性を論じる(第三証明及び第四証明)。最後に、結論としては、経験や表象から作り上げられた擬人的な神の観念を排し、純粹に概念によって神を思考したスピノザが到達した「内的作用因」である実体及び「無限に多くの属性から成る実体」としての神概念の哲学的意義が指摘される。

本論文は、スピノザが『エチカ』第一部定理 11 で展開した 4 つの神の存在証明に焦点を絞り、それらを徹底的に論じている。それゆえに問題意識の狭さについてはそれを否むことはできないものの、神の存在証明に関してこれほどまでに執拗に論じた論考もめづらしい。スピノザにおける自己原因の問題性、原因の外在性と内在性、実体の存在証明と存在様相との関係、事物性の量的把握、実体の一義性と属性の多様性といった、西洋近代の哲学が伝統的な宗教思维から離れたところで神と神の存在を思考する際に逢着するであろう種々の困難を、「自己原因」でありかつ「無限に多くの属性から成る実体」として定義されるスピノザの神概念とその存在証明を多面的に論じることにより、包括的に扱うことにほぼ成功していると評価してよい。また、トマス・アクィナス以来の自己原因をめぐる解釈論争、とりわけデカルトの多義的な因果性についての理解とスピノザにおけるその一義化の歴史的意義にも触れることにより、論考に厚みが加わったと評価できる。

しかし、その一方で、一義的な自己原因の因果性においては何故に作用因と形相因の区別が意味を持たなくなり、かつまた何故に実体が作用因としてのみ理解されるのかという問題、自己原因である実体としての神を内的原因あるいは内的作用因として思考することの困難、観念の十全性を規定する主語と述語の整合性についての「内的指標」の生得性という問題、さらにデカルトの實在的区別の概念をスピノザにおいて唯一の実体に帰属する無限の属性間の区別として改めて概念し直す際の困難、加えて、論点を先取りすることなくア・プリオリに自己原因として定義される実体の存在を自己原因の側から(すなわち結果の側からではなく)、単に「実体の本性には存在することが属する」(定理 7) ことのみによ依って「証明する」ということの問題性、あるいは実体の存在様相としての不可能性を否定することにより帰謬的に実体の存在の現実性を「証明する」ということの問題性、その際「証明する」とはいったいどういうことであるのかといった根本的な問題等々、よりいっそう困難な様々な問題を課題として残したことも事実である。

しかし、以上のような問題点はあるにせよ、スピノザの『エチカ』の形而上学的基盤を構成する第一部の神の存在証明を徹底的に論じるという、本論文の野心的な試みは、その包括性と深さにおいて他に類を見ないものであり、この点は大いに評価すべきであると考えられる。それらの問題点は、申請者の今後の研究において深化され、発展的に論じられることが期待されるところである。それゆえ、以上の評価をもって審査担当者は、本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断、認定する。